



GREEN WIND ASIA : 夢の世界建築史

Film Archive, 2020

フォトブックによせて

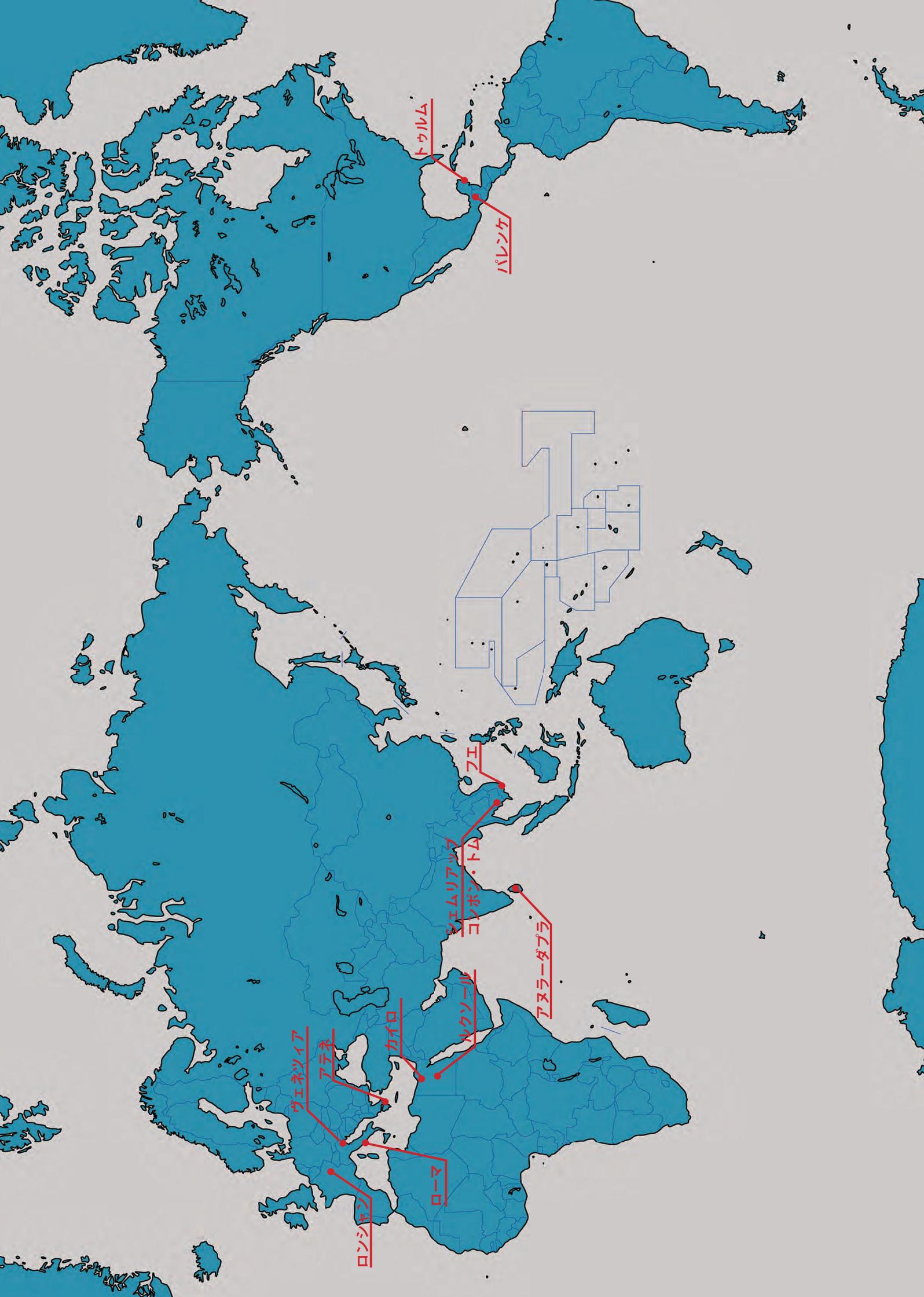
土を払いながら得意顔で遺物を見せてくる子供達がまとわりつく。倒壊した遺跡の石材の表面に残るレリーフや部材を繋ぐジョイントの痕などに私たちが気を取られているのを知ると、一寸見には気付かない、かすかだが意味ありげな凹凸の残る現場に案内してくれたりする。大部分はガセネタだけど、私たちもそういうやりとりを楽しんでいるうちに、やがて時間を忘れて笑いこぼしていたりする。どんな子供達も自らが置かれている環境を背負っているに違いない。けれども、同じように世界中の子供達は環境から超越した天真爛漫力で無垢な未来を生きているようにも思う。

世界中には多くの遺跡があり、そこにはたくさんの時間が堆積しているのだろう。それらの時間の層の間に、多くの人々が抱いた夢の痕跡が発掘されるのを待っている。それなりの努力をすればそれらの痕跡から、かつての花美しく咲きし時の夢のかたちに近づくことは可能であろう。

そしてもっと大切なことは、実現されることなく消えてしまったかもしれない未発の夢に想いを馳せること、そして必死な夢と無垢な夢の間を繋ぐこと、ここに夢の世界建築史への旅のはじまりがある。

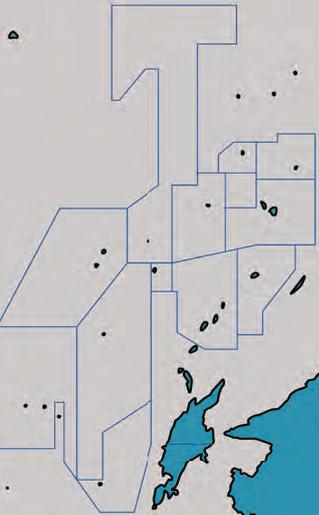
2021.04 中川武





トウルム

パレンケ



アエ

シェムリア

コンボフ・トム

アヌラーダブラ

ウェネツィア

アエネ

カイロ

ヌクソール

ロンシオン

ローマ



屋外オーケストラ前の静けさ,ヘロデイス・アッティコス音楽堂,1991

ギリシア、ローマだけでなく、地中海世界では、劇場などの古代遺跡が、古典的な音楽や劇だけでなく、現代のパフォーマンス発表の場として文字通り、保存と活用が実践されている。



ギリシャ, アテネ, パルテノン, 1991

パルテノンにはドーリックというには繊細で鋭いところもあるが、なにしろ巨大である。すぐそばに、このエレクティオンの女性的優美がつきそうように佇んでいることによって、絶妙の変容が生まれ、アクロポリスの丘には、いつも官能的な光が弾け、薫る風が吹き抜ける。



フエ, 顯仁門, 1998

グエン朝のフエ王宮は、ポーバン式の京城—主な宮殿がある皇城—皇帝の住まいを含む紫禁城の入れ子型になっており、皇城の正門である午門の他に東、西、北には、このような、タイルで装飾されたレンガ造の三間三戸の二重門がある。



ベトナム, フエ, 1998





フエ, 紫禁城にて, 1996

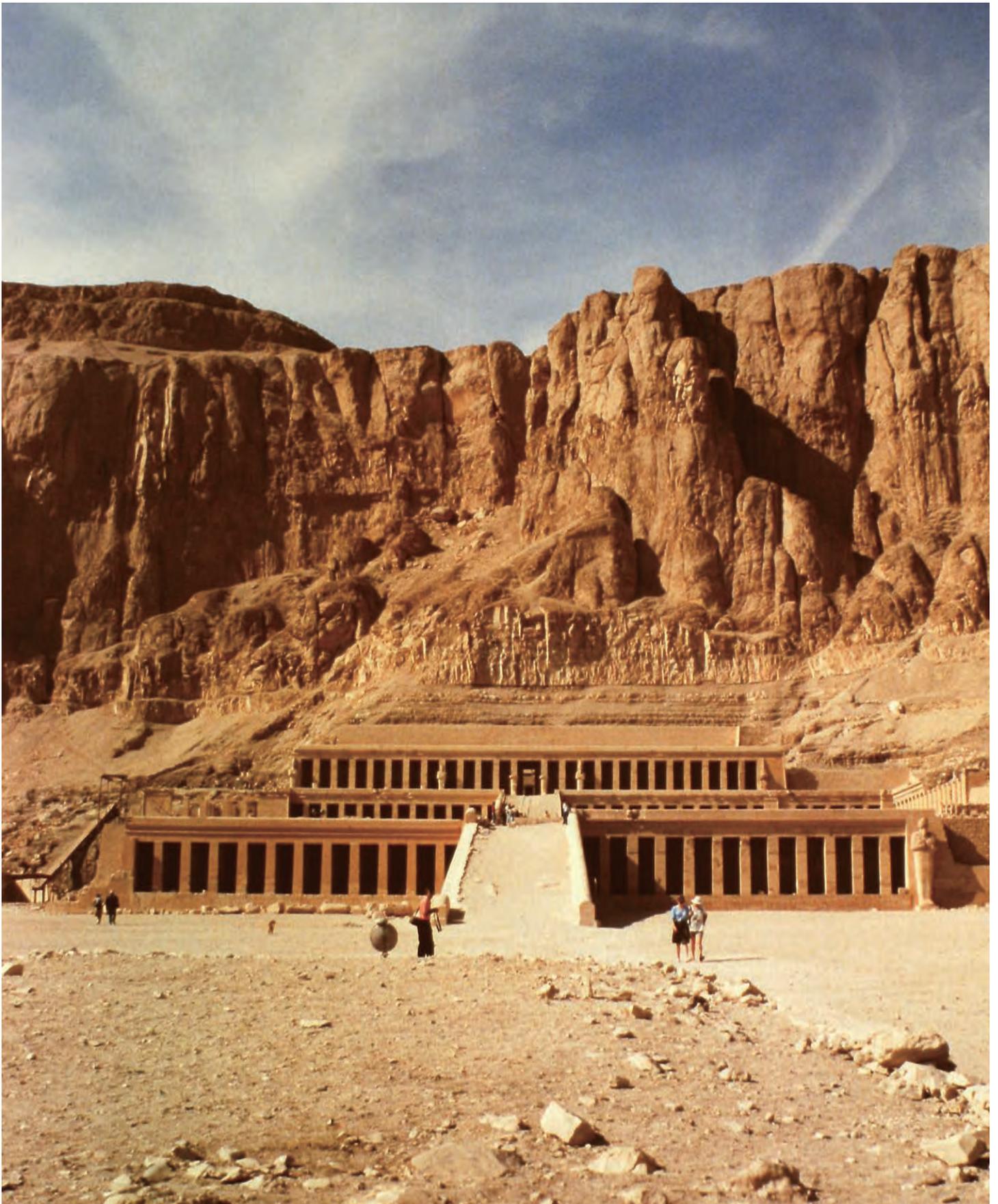
最末期の皇帝家族が居住した、重層のマンション跡から、正面中心の旗台を見返した図。歴代の宮殿跡が、柱列を模した植栽で偲ぶことができる。





スリランカ, アヌラーダプラ, ルワンワリセーヤ, 1982

スリランカの古代都市アヌラーダプラには巨大ストウパがいくつかあり、これはルワンワリセーヤのものであり、都市の顕著なランドマークとなっている。スリランカには村々の森の陰に小さなストウパが多く見られ、やさしい風景のランドマークとなっている。このストウパの復原根拠はやや曖昧であるが、人々の熱心な礼拝によって今も生きた聖地となっている。



エジプト, ハトシェプスト女王葬祭殿, 1990

古代テーベ、現ルクソール西岸。印象的なディール・アル＝バフリーの断崖の麓に、三段の水平列柱廊が展開するテラスの中央をスロープが突き抜けるハトシェプスト女王葬祭殿（BC1500年頃）がある。生者の都、東岸のカルナック神殿からお出ましになったテーベのアメン・ラー神の不可視の志向性が、はるかナイルを超えて、この水平列柱廊とスロープの明快極まりない強い有軸空間によって吸い寄せられる。どこへ、断崖の向こうにある死者の都、王家の谷へである。この生と死の絆を結節する軸線を都市の構造として空間化したことが古代エジプト文明の華やぎを生んだ新王国の基礎であった。





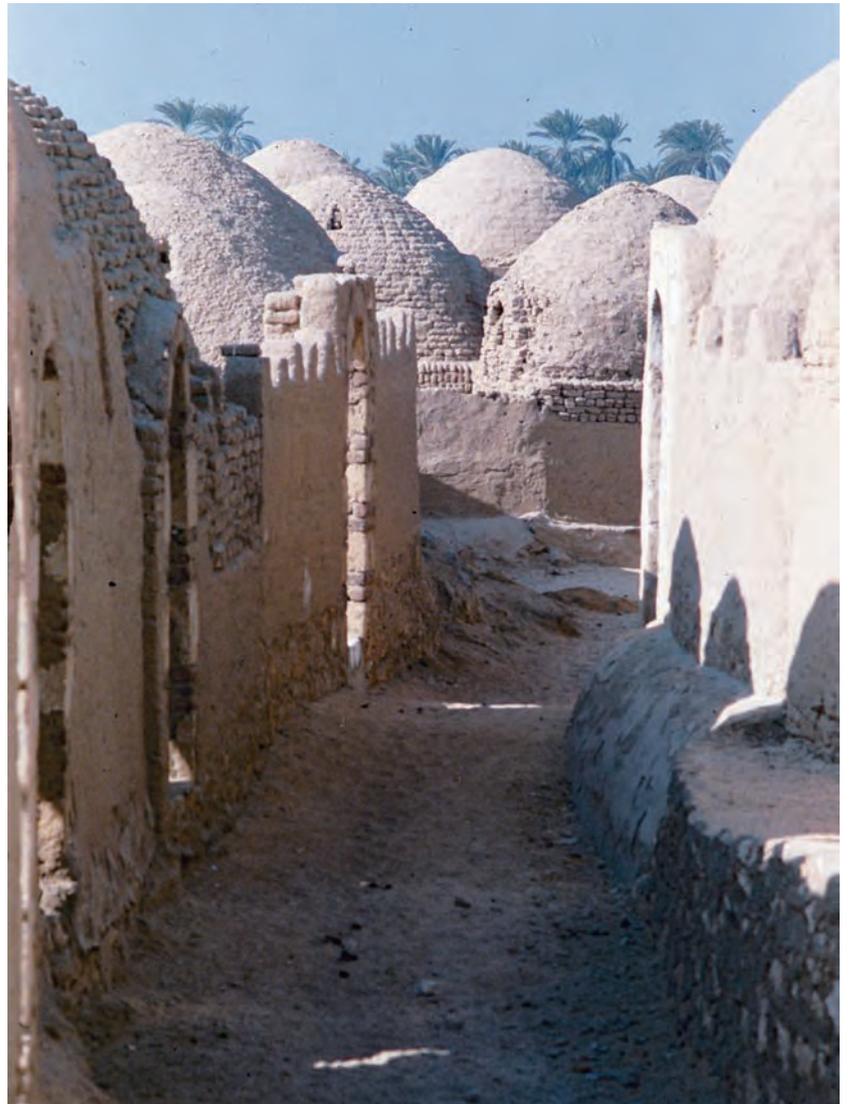
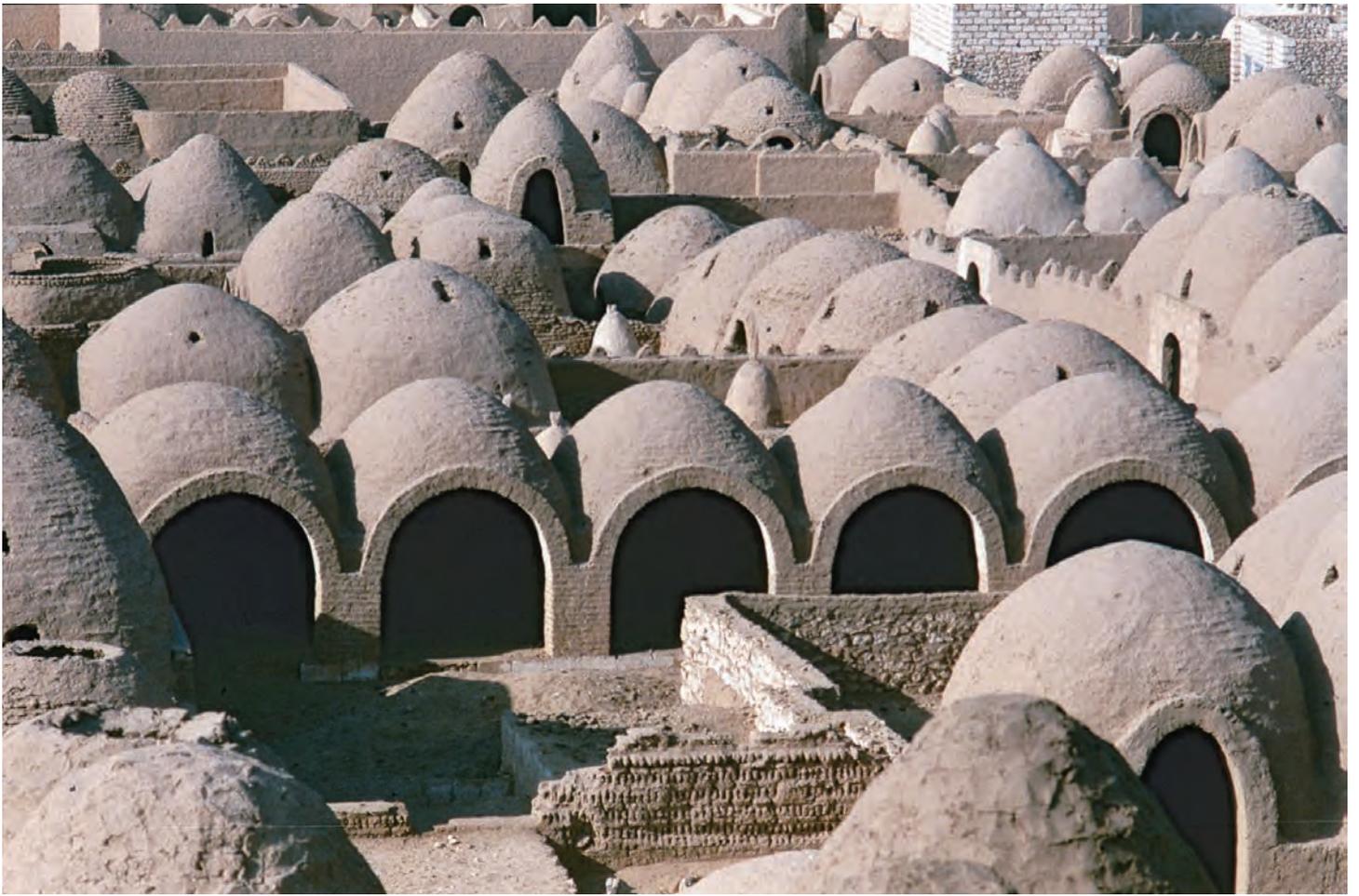


エジプト, サッカラ, ジョセル王の階段ピラミッド, 1988

エジプト, ルクソール, 1990

3000年続いた古代エジプト文明の中で最も華やかな新王国第18王朝の文化を開いたアメンヘテプ三世王の、ナイル西岸に王家の谷を背景に歴代の王達の葬祭殿の中でも最も壮麗かつ大規模なものであったことが発掘調査によってイメージされるようになった。しかし、現場は壮大な荒野に風が吹き抜けるばかりである。ただ門衛として築かれた王(ムムノンの巨像)の鳴き声が夜中に、その風によって流れるという。王は何を嘆いているのだろうか。





エジプトにて,1989

エジプトのどこの村々でも、集落のハズレには必ず、巨大な墓の群れがあった。土葬であること、礼拝のために親戚一同が集まるために、ネクロポリス(死者の都)はいつまでも、どこまでも栄える。



カイロ, イブン・トゥールーン, 1989

カイロで最も古いモスクの一つ、イブン・トゥールーンである。なにも無い広い中庭を囲む回廊の重厚なアーチ柱。外側を螺旋階段が昇る高いミナレット。ここからのオールド・カイロ等の景観は圧巻である。



11/27/87



イタリア,ヴェネチア,1989

アドリア海の潟に浮かぶ無数の島々、さらに運河や掘割に刻まれた無数のローマ以前の、とりわけ 14 世紀以降の地中海交易の富と自由と芸術の奇跡のモザイク都市ヴェネチア。大運河沿いの華麗な宮殿の列柱、たとえばサン・マルコ広場から望む 17 世紀のサルテ教会の丸いクーポラ。その前面には、中世の海の税関であったプンタ・デッラ・ドガーナが見える。この胎内に安藤忠雄さんの歴史的空間に現代的な宇宙卵を、という魅力的な構想が 2009 年に実現している。サン・マルコ広場でコーヒーを飲んでいる時と思うが、日本はまだまだダナアという“旅情”（？）がラグーンの海に漂う時である。





イタリア, ウェヌスとローマ神殿, 1991

フォロ・ロマーノとコロッセウムに近接した巨大な神殿の身廊部のドーム天井が崩落し、その断面が露出している。ギリシア・ローマは古典古代としてくくられることが多いが、廃墟となった遺跡は圧倒的にローマが風景になじむ。この点にギリシアとローマの特質の一面がある。そしてこの神殿の崩落断面を見て、同時代のローマ・パンテオンを連想しない人はいないでしょう。



メキシコ, ソカロ, カテドラル, 1989

メキシコシティの中心地にあるメキシコカトリックの総本山で、スペインバロックは過剰、ダイナミックを特徴とするが、それに輪をかけているのがメキシコバロックである。太いイオニア風の柱や透過性の高い双塔、どこかで見たような、しかし不思議な聖堂入口ファサードのデザイン。アステカ、スペインコロニアル、現代中南米のそれぞれの過剰が密集したメキシコ的なものの中枢がここにあるのかもしれない。



トゥルムス,メキシコ,1989

密林の中から顔を出しているユカタン半島の神殿ピラミッドは、まるで砂漠の中のピラミッドのようであったが、建造と修復技術にはあまり感心しなかった。むしろこのトゥルムス遺跡が面するメキシコ湾の透明度が驚きであった。







メキシコ, パレンケ, 1989

何度も増拡を繰り返し、結果的にそうなったのではなく、最初から何か複雑なものや錯綜した空間と形態を包含してしまった構成のようにも見えてくる。



アンコール, バンテアイ・スレイ, 1995

"アンコールの珠玉"、"東洋のモナリザ"と呼ばれたバンテアイ・スレイは中心部から離れていたこともあって、1995年頃によく一部地雷駆除が終り、石の上以外も歩けるようになった。

アンコール, プノン・ボック, 1995,

アンコール平原にある小高い山は聖地としてその頂にヒンズーの神が祀られている。地勢上の要地という理由の他に、ポコッと盛り上がった山の形が、シンボリックなランドマークとなったのかもしれない。まさにボック山（プノン＝山）らしく、崩壊した大きなリングと、何故このような倒壊がという驚きのある遺跡が今もジャングルの奥や小山の頂に人知れず佇んでいる。





アンコール, アンコールワット, 1996

カンボジア・アンコール遺跡には僧侶の黄色の袈裟がよく似合う。時に少年僧のそれは、彼等の、逸早く取り戻した笑顔が、いろんなものが“これからだ”という気持ちにさせてくれる。





1996年7月のバイヨン北経蔵修復工事に初めてラフタークレーン(25t)を導入。カンボジア人オペレーターの訓練を始めた。オペレーター候補生たちは、日本人専門家の腕に対して、一せいに驚きの声を発していた。



アンコール, JSA, 1996

JSAの石工指導者として参加された山本勇氏が、1994年以前にアンコール保存事務所に寄贈されたユニックを、当時まだ車輛や重機を調達できなかったJSAが借りていた。これはクメール正月のイベントにJSAの楽団(?)が参加した時の一コマ。皆で楽器を奏でられる喜びが爆発した。サオ・サム(棟梁)が若いのに驚く。



カンボジア, サンボー・プレイ・クック, フライング・パレス, 8～9世紀頃, レンガ造

バイヨン、という世界でも稀有な謎の寺院を12世紀～13世紀のアンコールで、クメールの人々は、どんな想いを込め、どのようなアイデアに励まされてつくることができたのか？ この謎は、アンコールから150kmほど東方、コンポントム郊外の、プレ・アンコールの遺跡、サンボープレイクックのフライング・パレスを見た時、氷解、というか、うだるような暑さの中に溶解した。



アンコール, プラサート・スープラ, 1995, ラテライト造

アンコール・トム王宮前広場の西側 象のテラスは仏・EFEOが、そして東側のプラサート・スープラは日本・JSAが修復・発掘調査に取り組んでいた。当時のアプサラ総裁のヴァン・モリヴァン大臣に日仏協力モデルとして注目していただいた。

写真・文／中川武
企画／GREEN WIND ASIA 事務局
編集／石井由佳
発行／2021.4